

御取納丁銀とは

- ・御取納丁銀とは、石見銀山産出の銀で製作され、永禄三年（一五六〇）正親天皇の即位式にあたり毛利氏から天皇家へ献上されたものである。
- ・正親天皇は、後奈良天皇崩御のあとを受けて、弘治三年（一五五七）十月二十七日に踐祚（せんそ）した。
- ・しかし、即位式を挙げたのは二年以上経った永禄三年（一五六〇）正月二十七日であった。
- ・当時は朝廷の窮乏が甚だしく、即位式も毛利氏の献資に頼らざるを得なかった。
- ・毛利氏が朝廷から進献を要請されたのは永禄元年（一五五八）の夏頃からのようで、献納がいつ行われたかは明確ではないが永禄二年（一五五八）二月から五月までの間と推定されている。
- ・献納に時間を要したのは、この頃、毛利氏は石見銀山をめぐる尼子氏との抗争で多大な軍資金が必要であったからとみられている。
- ・即位式が終了すると、その功により朝廷から毛利元就が陸奥守、隆元が大膳大夫に任ぜられた。
- ・御取納丁銀の製作は、この即位式の費用に充てた際の一回限りであった。
- ・そのため数量が限られ、他の丁銀のように数の遺存がなかったと考えられている。